

マンデの狩人の樂師

—平等主義的結社における讃め歌—

中村雄祐

1 はじめに

現在のマリ共和国、ギニア共和国の国境付近のニジェール川上流部、いわゆるマンデ地方を中心として西アフリカのサヴァンナ・サヘル地域、いわゆる西スーアンの広い地域にわたって「マンデ系」(mandé, mandingue)と総称される多くの社会が存在する。これらは、(1)中世にこのマンデ地方を中心に権勢を誇ったという広域交易国家、マリ帝国と何らかの点で関わりを持っていたという歴史意識を有し、(2)そして実際に、言語、観念体系、社会組織等の面で様々な程度に共通性を持つ、という特徴を持つ諸社会である。

それらマンデ系諸社会において発達しているものの一つが高度に専門化された語り部・樂師の制度である。とりわけ著名なのが、大航海時代以降西アフリカ海岸部を訪れるようになつたヨーロッパ人によつて用いられるようになった「グリオ(griot)」という呼称によっても知られる内婚世襲の語り部・樂師、「ジュリ(jully)」及び

「ブネ(fune)」^{*1}である。中世のマリ帝国にまつわる伝承を今に伝え
るというグリオたちについては、その該博な知識、卓抜な技能、そ
してまたヨーロッパ人探検家たちの興味的ともなつた奇矯な振る

舞いのゆえに、ヨーロッパによる植民地化以降、様々な觀点からの
精力的な研究が進められてきた。実際、歴史伝承の保持者という役
割を担いながら、大嘘つきとも称され、また物乞い、恐喝されすれ
ば、(1)中世にこのマンデ地方を中心に権勢を誇ったという複雑な性格を帶びた内婚
世襲特殊職能民、グリオの言葉、振る舞いには、西スーアンが経験
してきた波乱に満ちた過去が深く刻み込まれている。彼らは、「文
字無き歴史社会」^{*2} マンデにおける声、言葉そして歴史を文字どおり
体現している。

ところで、今までのところグリオほどに研究者の注目を集め
てこなかつたとはいゝ、マンデ諸社会にはグリオと並ぶ歌、語り、樂
器演奏の達人が存在する。それは狩人の樂師、「ソロ(soro)」であ
る。狩人、「ドンソ(donsso)」を讀え、その武勇を語り伝えること
を中心とするソロの芸は、声、樂器演奏によつて聴衆との間に取り

結ぶ独特の関係のあり方において、グリオの芸と本質的に共通する性格を備えている。それは「讃め讃える声」というマンデ社会を越えて西アフリカに広く認められる声のあり方であるが、マンデにおいてその声は一種独特的の発展を遂げてきた。^{*4}

右にも述べたように、マンデの讃め讃える声の芸人として一般に名高いのは内婚世襲のグリオである。今日行われる彼らの芸は、「ひたすらに聴衆を讃め上げ、煽り立て、祝儀を受け取り、さらに讃め上げ、煽り立て……」という「音と物の応酬」の上に成立するものである。しかし、その芸はつねに遠回しの、時にはあからさまな物乞いや恐喝に転化してしまう危険性をはらんでいる。というのも、ヨーロッパによる植民地化以前、グリオもその一部である内婚世襲特殊職能民⁵、「ニャマカラ (Nyamakala)」は社会の大多数を構成する自由民、「ボロン (Borom)」より身分が低く、そのかわりに自由民に対して自由に物乞いをすることができるという特権を有してきたからである。しかも、植民地化の過程で強制的に奴隸制度が廃止され、それまでの自由民と奴隸の区別が取り払われて以来、グリオにとっては少なくとも表面的にはニャマカラ以外の人間はすべて自由民、つまり彼らの讃め歌の対象となっている。グリオの芸は聴衆に、一定の報酬を払って聴くのでは得ることできない、蕩尽の悦樂と結び付いた音の快感をもたらすのだが、それはつねに元あるいは新・自由民（＝優等の聴衆）

という特殊な社会的文脈の上に展開されている。そこでは「芸への祝儀」と「下層民への施し」の境界は決して明確ではない。^{*5}

本論で論じようする狩人の樂師、ソロもまた、その「讃め讃え、煽り立てる声」の芸に重きを置いているという点でグリオとある通じる性格を備えている。しかしながら、ひたすらに野の獣を狩ることをそのつとめとする狩人たちを標的とするソロの活動はグリオとは異なる独特の性格を帯びている。まず第一に、グリオが内婚世襲の規則によってその芸を閉鎖的に継承してきたのに対しても、ソロはどううな出自の人間であろうと男なら、やる気さえあれば誰でもなることができる、という点で両者の社会的地位には大きな違いがある。同様の相違はそれぞれの聴衆である自由民と狩人の間にもあってはまる。以下に見るように、狩人とその樂師はマンデ社会の中では極めて例外的な平等主義的結社を構成しており、狩人とソロの間には、グリオとその聴衆の間のような世襲的地位の優劣は存在しない。世襲の属性を持たない狩人の狩人としての名声は、あくまでも狩という死の恐怖と隣り合わせの武勇に挑むことによってのみ獲得されるのだが、その専属の樂師、ソロはそこで決定的な役割を果たしてきたのである。

内婚世襲のグリオと狩人の樂師、ソロとはある面ではかなりの相同意を示しながら、また他の面では対称的に異なっている、という興味深い関係にある。とりわけ注目すべきは、讃め、煽る声の芸の相同意と、その芸の展開される社会的文脈の対称性である。本稿は、これらの芸人の姿に象徴されるマンデ系諸社会における声・言葉の

制度の考察の一環として、狩人の樂師、ソロの活動を考察することを目的とする。主題はマンデの狩自体ではなく、狩というマンデ社会における一種の英雄的行為がいかに語られ、歌われるのか、特に、グリオにおいては極めて階層的な関係の上に展開し、さらにその関係を強化する「讃め、煽る声」の芸が、狩人という村の捷から逸脱した男たちを相手にした時にはどのように展開してきたのか、を考察することにある。

狩人の樂師の活動の考察は、「無文字社会の歴史家 (historiens dans les sociétés sans écriture)」という尊称をしばしばその意味するところを充分に検討しないままに安易に授与されることはまた剝奪されてきたグリオという希有な言葉の専門家の活動をより精緻に検討するための重要な手がかりとなる。ともに英雄的行為を讃め、煽り、時間と空間を越えて伝えることを目指す二つの異なる声の存在は、「名を残す」という文字と声の違いを越えて言葉が持つ志向性が、マンデという文字を持たず、しかもつねに外部世界と連動して変化を遂げてきた社会においていかに錯綜した様相を呈してきたのか、すなわち世界に数多く存在してきた無文字社会における歴史のあり様のひとつを私たちに示すであろう。さらに、ヨーロッパによる植民地化以降日に至る急激な変化、いわゆる近代化が彼らの声・言葉のあり様に決定的な影響を与えてきたことは、まさしく近代的行為の典型である調査行為の成果である本論文からも切実にうかがわれるはずである。

紙幅の制限上、狩人の樂師の活動を考察する上で当然参考される

べきグリオへの言及は前者の活動を理解するのに必要な範囲にとどめる。一種の語り部・樂師の比較考察は別の機会に譲ることにしたい。なお、本論考は、一九八八年から九〇年にかけてマンデ文化の中心的地方のひとつといわれるマリ共和国西部、キタ (Kita) 周辺で行った調査に基づいている。

2 マンデ系社会

一八八〇年、西スーザンの植民地化を目指すフランスの最東端の基地、現在のマリ共和国カイ州メディンの要塞に駐留するフランス軍のもとに、そこから三〇〇キロ程さらに東の内陸部の小酋長国、キタから救援の嘆願が届いた。キタの有力者、トゴンタン・ケイタは、その近隣諸国、とりわけ南側のビリゴからの絶え間無い奸隸狩略奪に耐えかね、ついにカイ地方にまで侵入していたフランス軍の介入を求める決心をしたのであった。要請を受けたフランス軍は同年4月25日、キタとの間に保護協定を結ぶと、翌年にはキタに要塞を築き、一八八二年にはビリゴの中心地、グンバンコの砦を粉碎するなど、周辺地域の平定作戦に乗り出した。それが現在のキタ市の直接の始まりである。その後、キタにはダカール・ニジェール鉄道の駅も置かれるなど、西スーザン植民地政策の拠点のひとつ、そして一九六〇年のマリ共和国独立以後はカイ州キタ県の中心地として重要な位置を占めてきた。^{*7}

狩人とその樂師の活動を始めとして「マンデ社会及び文化」を主

題とする調査を進める私とキタの人々の間ではいつの間にか「この土地に白人たちがやってくる前 (yanni tubabuu ka se yan)」といふ言葉がなれば慣用化するようになった。「白人が来る前」の長い時間、すでにアラブ、ヨーロッパ世界と、直接、間接の交渉を持ったてきたマンデ社会については、中世以来アラブの地理学者たちの記述を始めとして様々な文字記録が残されており、一四世紀頃に砂漠の向こう、「ピラドゥ・アル・スーザン（黒人の土地）」にあつたという黄金の国「メリ」、私たちが今日呼ぶところのマリ帝国の繁栄振りについての記述も見受けられる。しかし、これから概要を述べるマンデ社会の姿は、主として一九世紀後半、ヨーロッパによる植民地化直前の混乱に満ちた状況に合致するものである。植民地化はマンデ社会をそれまでとは根本的に異なる状況に置くことになった。そして、私とキタの人々が「本来の黒人 (fanufuyayere)」の姿について語る時にもっぱら依拠するのは、右に述べたような経緯の末にフランス軍が到来する以前、「白人 (tababu)」が来る前の世界なのである。とはいっても日本から来た「白人」と話す彼ら「黒人」が、実際には白人が到来してすでに百年以上がたつた、激しい社会変化を経た現在に生きていることはいうまでもない。

私が調査したキタ地方も含め、一八〇一九世紀当時の西スーザン地方は、様々な規模の社会が互いに戦争、奴隸狩りを繰り返す状態にあった。それらの社会の中にはセグー・カールタのバンバラ族、あるいはイスラム聖戦を率いたトウクルール族のように軍事力を背景に広大な地域を支配下におく集権的国家に成長した社会もあった。

が、それらの強国の周縁部に位置していたキタ地方は一種の恒常的な内乱状態にあったようである。一九世紀末、キタに進駐したフランス人植民地行政官は、当時のこの地域の様子を次のように描写している。

「人々は、つねに敵対関係にある多くの種族からなっている。しかしフルベ族を除いて、好戦的なものはいない。強大な権力は存在せず、恐しい敵を相手には戦うこともできない弱小の土豪たちがいただけである。……それは犬に追われる猫の物語である。犬に追いかけられると木に登り、いなくなると木から降りる。しかし猫が木のもとを去ることはない。」

一口にマンデ系社会といつてもその状況は様々であったが、トウジンビエ等の雑穀の栽培を中心とするこれらの社会は基本的には

に

(1) 父系出自原理に基づく分節集団の形成

(2) そぞらの集団の出自による階層化

という2つの原則に従って構成されている点で共通していた。¹⁰

マンデ社会では「ジャム (jamu)」と呼ばれるクラン名が父系で継承されるが、その広がりはまさに西スーザン全域に及んでいる。それはマンデの人々が中世以来、西アフリカ全域にわたって移動、拡散を繰り返してきたことの結果であるのだが、このようなクラン名の広がりに比べて、一九世紀末のキタ周辺の諸社会の規模はかなり小さく、村 (daguz) を越えた社会組織が、最大でも数十の村からなる小首長国、「ジャマナ (jamana)」を越えることはまれであった。

同じ地域で同クラン名を持つことがそのまま確固とした血縁意識の存在を意味するわけでもなく、同じクラン名を持つてはいるが、移動経路も時期も大きく異なる複数のリニージ（*bonda* あるいは *kabila*）がひとつの村に存在するということもしばしばある。ひとつの村はこののような複数の父系リニージから構成されており、その構成は植民地化、独立を経た現在でもほぼ同様である。

父系出自に並んで、マンデ社会には一種の階層制が存在してきた。それは他の諸制度と並んで中世のマリ帝国にその直接的起源を持つと考えられるが、一般にマンデ社会はそれぞれが内婚を行う次のような3つの階層から構成されていたといわれている。

ホロン (*horon*)

農耕、戦争に携わる自由民

ニヤマカラ (*nyamakala*)

鍛冶師、グリオ、皮細工職人などの特殊職能民

ジョン (*jòn*)

奴隸

不安定かつ小規模な社会においてこうした階層制が実際にどの程度実現されていたのかは、地域、また解釈によって様々である。

BAZINによれば、セグーのように略奪、奴隸狩に基盤を置く国家が成立した地域では、厳密にいえばかつて奴隸であったことがない者、あるいは祖先に奴隸身分の者がいなかった者つまり完全な自由身分を主張できる者はひとりもいなかつたはずだという。^{*11}

西スーザン全域を覆っていたこの戦乱状態は、結局一九世紀後半

のヨーロッパ列強による植民地化によって強制的に終止符を打った。「野蛮な奴隸狩をやめさせ、平和状態を実現させる」ことを目指した「平定（pacification）」政策によって、土着の権力者は植民地行政の下位に組み込まれ、奴隸狩、売買のみならず、土着の奴隸制度そのものまでが廃止された。

しかしながら、現実の階層分化の程度はともかく、マンデ諸社会は、自由民、奴隸あるいは内婚世襲特殊職能民のうちのいずれの血を引いているか、によって各人の社会的地位の優劣を判定しようとする強い階層意識を持ち続けてきた。次第に薄れつつあるとはいえ、その強さはこのような階層制が現実的な意味を失いつつある今日の彼らの言動からもうかがうことができる。しかるに、本論の主題となる狩人及びその楽師とは、他の人々同様村の人間でありながら、こと狩に関する限り、上にあげたマンデ社会の2つの原則、出自と階層制があてはまらない例外的な存在であり続けてきたのである。

とはいっても、本節の冒頭で述べたように、狩人の活動は基本的に植民地化される以前の、現在では失われつつある世界に属するものである。以下に述べるように、狩の舞台となる野もまた、今日私たちが考えられるような「野生動物の生息する自然地」とは異なる特別な場所と考えられてきた。しかし、国境線を持った国土という空間があらわれ、野生地が自然公園として国家によって管理される現在では次第に色あせつづするのが現状である。率直にいえば、狩人の結社のあり方や狩人とソロの関係に関する調査はともかく、私は“マン

デ的な狩自体には立ち会うことができなかつた。その理由として

次のようなことがあげられる。

(1) 狩という活動が極めて苛酷な、しかも秘儀的、閉鎖的な性格を備えており、マンデ社会の人間であつても常人には近付き難いものであること。

(2) 近代的な狩猟技術の導入により、狩自体の性格が変化していること。

(3) 乾燥化、農地拡大等の影響により、野生動物が減少し、自然保護の目的から政府によつて狩猟が制限されていること。

私が接することができたのは狩自体よりも、もっぱら「狩とは……」、「××村の狩人が……」等の狩に関する様々な言葉である。¹²⁾それら、狩に関する説明や大狩人の逸話などは狩人以外にもマンデの人間の誰彼からもきくことができるが、中でも最も饒舌な語り手が狩人の樂師、ソロなのである。

これから、キタでの調査、及び文献資料をもとにマンデの狩人とその樂師の活動を論じていくが、まず最初に狩の舞台となる野がどのような空間と考えられてきたのかを概観する。野を、そして狩とは何たるかを知らずして、狩人の樂師の言葉の紡ぎ出す世界を理解することはできない。村を囲んで広がる野とは、まさに村の撻の外側にある、村とは異質な世界である。

3 マンデの野と村

一九世紀当時のマンデ諸社会は階層化された様々なレベルの父系分節集団を中心に構成されていたが、一つの場所に集まつて住む最大の社会的単位は幾つかの父系リニージからなる村である。村の周囲にはトウジンビエ、ソルガム等の畠がつくられており、それら人間の活動する空間を取り囲むようにその向こうに広がつているのが、野(waza)あるいはkayago)である。その野を越えた向こうにはまたほかの村があり、それらの村々がジャマナと呼ばれるゆるやかな首長制社会を構成していた。

さて、このような村の世界に暮らす者にとって野は最も危険な空間であったという。野とは人間の知力の及ばない恐ろしい場所であり、そこに棲む獸(sabu)や精靈(jine)たちは、ただ出会つただけ、あるいはその足跡を踏みつけただけでもその人間の命を奪つてしまふほどの恐い力を持つた存在である、とされる。しかしながら、その危険さにも関わらず、というよりも、まさにその人知を越えた力のゆえに、野は人が生を営む上で欠くことのできない様々な知識、技術の源泉であり続けてきた。野に生える植物は、その知識を持つ者にとっては、様々な病気を治し、また災厄を逃れるための呪物。薬物の宝庫である。狩に関するものでも、狩人の必須の武器である銃、そして狩人の樂師が演奏を行うのに欠かせない弦楽器、"ドンソ・ンゴニ donso ngori" などは狩人が野に棲む精靈との盟約に

よつて村に持ち帰つたものと伝えられている。

この危険ではあるが、知識や技術の源泉でもある野に足を踏み入れることはできるのは、野にまつわる知識に精通した特別な人々、すなわち治療師や占い師や秘密結社の高級社員、そして狩人たちである。これら不思議と力と危険に満ちた知識を極めた者は、「スバガ(subgaga)」、「夜の主」と呼ばれる。しかしながら、それらの知識はみだりに公にすることのならない、その道を極めた者のみが手にすることができる極めて秘儀的なものであり、彼らとて野に入るにあたって必要な準備、手続きを怠つたりすれば、また時にはたとえ何の落ち度も無くとも、いつ命を失わないとも限らないのである。

どんなスバガであろうと決して野の秘密を知り尽くすことはできない、と彼らはつねに語る。マンデの人々にとって野とはつねに両義的な場所であり、野にまつわる知識、技術もまたその所持者を破滅させかねない危険をはらんだものであった。そして、野という空間配置自体が変容した現在でも、力と知識を秘めた両義的な野のイメージは治療師や占い師、彼らのもとに通う顧客たちの間では少なからず保たれている。

4 狩 人

狩とは恐ろしく摩訶不思議な野で独り昼夜を過ごし、そこに棲む獣を殺し、そして生還してくる、といういへんな偉業である。野に棲む獣たちは、それぞれに不可思議な力を備えており、充分に呪われている。

的武装を施し、その獣に応じた狩のやり方をとらなければ、たとえうまくその獣をしとめることができても、こちらも命を奪われ、時にはその係累にまで及ぶような災厄を引き起こすといわれる。この狩人の命を脅かす獣の力は「ニヤマ(nyama)」と呼ばれる。獣に限らず、生命のあるなしを問わず様々なものに宿るといわれるニヤマについては様々な解釈がなされているが、ほぼ共通しているのは、意識的にせよ無意識にせよ、人間が、生命のあるなしを問わずある対象に向かつて破壊的な行為を行つた場合、その対象から行為者を攻撃すべく発される復讐的な力、ということである。^{*13} 様々なニヤマの中でも野の獣の宿すニヤマは極めて強く危険であり、獣の生命を奪うことを常とする狩人はつねにこれらのニヤマの復讐の脅威にさらされている。狩を成就させるためには、ニヤマから身を守るために野に棲む獣たちの特性についてはもちろんのこと、精霊や草木について、また災厄を予期し、避けるための占いや呪術など、野で生きるための知識・技術のすべてに精通していなくてはならない。

このように、いわば特権的に野をその活動の場としながらも、狩人たちは村での生活から完全に絶縁しているわけではない。彼らが獲物を求めて野に分け入るのは、主に収穫後の農閑期にあたる乾季の間であり、その他の時期はある特定の出自、階層に属する村人として村の捷に従つて暮らしている。しかしながら、狩に関する限り、彼らはそれらの村の捷から逸脱し、また独自の組織を持っているのである。

狩人、およびその樂師になるための条件は、ただひとつ、男であることである。そして原則的にマンデ社会で狩を行ふ者はすべて、

同士は互いに狩笛を吹きあつて互いを攻撃しないようにした、とい
われる。^{*18}

“マンデ・ハ・バソロモ”(mande-habasomo)、「狩人の結社」の成員となる。CISSEは、たとえ割礼前の少年ですら、狩人の結社のメンバーになることができる、と述べている。この男女の別を除けば、狩人の結社では村の暮らしを律する重要な掟がことごとく否定される。まず注目すべきは、たとえ父子であっても、もし狩の道に入ったのが息子が先であつたなら、結社の中では息子の方が兄(*brother*)、父が弟(*brother*)^{*15}と見なされるという、村の掟からすれば信じがたい規則である。このような年長者優越の否定は、結局、父系出自に基づく分節的社會組織、そして父系出自に重なるかたちでマンデ社会を規定するもうひとつつの原則、階層性をも否定することにつながる。つまり、男女の区別を除いて、マンデの村に生まれ落ちた者が生得的に持つ社会的地位が狩人の結社においては完全に否定されるのである。^{*16}

実際の親子関係さえも否定されるという狩人の結社において意味を持つのは野での狩の経験、それを支え、それに由来する知識、技術である。狩人の結社の主たる目的は「祖先より伝わるしきたりに則った狩の永続、狩に関わる種々の秘儀的保持」にある。そして狩という秘儀的活動を行ふに当つては、女性との接触をはじめとする種々な穢れからの「サヌヤ(sanuya)」、「純潔さ」が必須の条件とされる。狩人は何よりもまず高潔でなければならない。それら秘儀的知識の伝授、共有、純潔さの維持を基本とする狩人の紳は、他のあらゆる社会関係に優先し、例えばかりては戦場においてさえ狩人

武人は、絶えざる変動を経験してきたマンデ社会において形作られてきた「男らしさ」(casa)のひとつ典型であり、そのままcasaの同義語として通用することも少なくない。武人をさす表現には、右の二つの中にも *wazanay* = 猛獸のような状態、等があるが、現在キタでしばしば耳にするのは *ce farin* である。日差しの厳しさ、唐辛子の辛さをあらわすのに日常的に用いられる「ファリン

(fairin) という形容詞が、男（チエ、*či*）に対して当てられる時、
“チエ・ファリン”とは、氣性の激しい荒々しい男をさす。ファリン
であることは、卓越した英雄的行為を成し遂げる男に不可欠の条件
であり、偉大な狩人もまたすべて、野に棲む獣たちを最後の一匹
までとめるまで追い続ける、情け知らずの荒々しい心を持った武
人なのである。野の恐怖に打ち克つ勇猛さなくして狩の道を極める
ことはできない。

すなわち、「野の不思議に精通した夜の主にして荒ぶる魂を抱いた武人」、これこそが眞の狩人の姿である。そしてこのような狩人の姿を言葉によって最も鮮やかに描き出すのが本論の主題である狩人の樂師、ソロである。ソロの語る狩人の物語に私たちは眞の狩人のあるべき姿を聴き取ることができるのだが、注目すべきは狩人の野での冒險を語るソロの声は彼の前にいるもう一人の狩人の魂を燃え立たさずにはおかないのである。ソロの介入なくして狩という英雄的行為は完結しないのである。この点において、ソロの言葉は狩人をめぐるマンデの他のどの言葉とも異なるある特別な力を帯びている。ソロの声・言葉はそれが彼と狩人との間に取り結ぶ特異な関係を抜きには論ずることができない。

5 狩人の樂師

現在キタ周辺で活動するソロは私の知りえた範囲で三人いるが、そのうちもともとこのキタ・ジャマナ出身というソロは一人しかい

ない。もう一人は鉄道駅として植民地時代以来周辺地域の中心として発展してきたキタに移住してきた者で、残る一人はソロとして諸国遍歴の途中でキタに滞在中であった。私が主に接する機会を得たのはキタ在住の二人であったが、彼らも農閑期である乾季になると各地の狩人の結社を訪ねてまわり、キタを留守にすることも多かつた。そのかわり、時折キタを訪れるソロたちに会う機会もあった。

狩人の樂師になるための条件は狩人の場合と同じで、男ならそのままれ如何に関わらずやる気さえあれば、誰でもその樂器、ドンソ・ンゴニを手に取り狩人の物語を語ることができるという。狩人の場合と同様に、ソロを志す者はその道の先達のもとで狩人に向かって語るための修行をつんでゆく。それは、偉大な狩人の物語の数々、狩人を讃美讃嘆するための言葉遣い、それらの言葉をのせるべき伴奏の施律などからなる。

ソロは狩人にとってなくてはならない存在とされるが、原則として狩自体にソロが同行することはない。^{*21} ソロの参加が要請されるのは狩人の結社が村で行う様々な集まりであるが、そこで求められるソロのつとめは、居並ぶ狩人に向かって古今東西の偉大な狩人の武勇を語り、そして彼らを讃美上げ、煽り立ててさらなる狩へと驅り立てるにある。

ソロの行う言葉の技は大きく分けて二つある。ひとつは“ドンソ・マーナ (*donsó maná*)”と呼ばれる狩人の冒險譚で、それらの狩人の物語のうちに私たちは前節で述べたような狩人の姿を認める

ことができる。本論ではその詳細に立ち入る余裕はないが、以下にある一例の粗筋を紹介する。

シティヤ・マンビと獣の策略

「あるところにシティヤ・マンビという名の優れた狩人がいた。彼は情け容赦なく獣をしとめる。このままでは全滅してしまうといふので獣たちが集まり、狩人を殺す相談をする。牝カモシカが自分が人間の女に変身して狩人を野に連れ出すと名乗り出る。牝カモシカは若い女の姿で村の狩人を訪れ、自分の親族のために狩の秘密を教えるよう頼む。狩人はやってきた異人の女（＝牝カモシカ）を気に入り、母親の忠告に耳を貸さずして狩の秘密を明かし、一緒に住もうと言い寄る。しかし、女は狩人の母と対立し、家が恋しいといって、狩人に送って行くようになんか頼むが、狩の道具はいっさい持たないよう言いくるめる。野のまつただ中で女は姿を消し、待ち伏せしていた獣たちに狩人の秘密を教える。狩人は狩の秘密を知った獣の群に追いかけられ、苦難に陥るが、ハイエナの助けによって、また母に貰ったお守によつて危機を脱して獣たちを皆殺しにする。」

優れたソロは古今東西の偉大な狩人の物語を幾晩でも語り続けることができるというが、これらの物語に加えてソロが行うのが、狩人への讃め歌、『ドンソ・マジャムニ (donso mujamuni)』である。

獣たちの策略、魔力をものとせず、取り憑かれたように野へと向かう狩人の物語、ドンソ・マーナを語るソロは、目の前のもうひとりの狩人に対して例えば次のように歌いかける。

n te kuma donso ma

俺は狩人には語りかけない

あしお前の分（＝獣の肉）が俺の口に入らないなら

basilan donbagga cayara

草木染め（＝狩人の装束）を着る者は増えた

marifa tabaga cayara

銃を手にする者は増えた

sogo kelen fagabaga dorywara

だが獣一匹しとめる者さえも減ってしまった

dibi ma nyin dibi

闇はよくな、闇

ne ayaroke nyegcan tuden tegumasina la

俺が語り合つ仲間は旅に出てしまつた（＝死んでしまつた）

lakara dibi na siwanan de

あの世の闇、俺は恐ろしい

ni i besiran dancharca

恐ろしくない、臆病者よ

ni i besiran i ka tsao

恐ろしいなら、家にいろ

これらの挑発的な言葉に対して狩人は銃を撃ち鳴らして誓いを立て、次なる獲物を求めて野へと分け入っていく。しかしソロの活動の場はあくまでも村であり、そのつとめは狩人を野から言葉で迎え、

言葉で送り出すことにある。ソロの奔放な言葉に対し狩人は実際に野で獣をしとめてその肉を村で待ち受けるソロにもたらすこと、つまり武勇という行為によってしか応えることはできないのである。

6 言葉と行為

何故に狩人にはソロが必要なのか、という私の問い合わせに対する答えは次のように答える。

「もしソロがいなかつたら、誰が俺の『名』(name)を世界に広めてくれるというんだ」

「トゴー」とは名前一般を、クラン名、「ジャム」に対し個人名を、さらには評判・名声をも意味する言葉であり、狩人の名が広まることは、すなわち彼の狩人としての名声が広まることを意味する。そしてソロは繰り返し歌う。

死がたとえ人（の命）を終わらせよう

manas

名を喰い尽くすことはできない

numas

そしてまた、ソロが狩人に同行しない理由を狩人たちは次のようにいふ。

「もし野でソロのドンソ・ンゴニの音でも耳に入ろうものなら、もう興奮のあまり我を忘れて銃も刀も放り出して獣に飛びかかってしまうだろう」

これらの言葉のうちには専門の言葉の主に託して英雄的行為を語り継ぐことに精魂を傾けるマンデ社会の声・言語観が集約されている。

ソロの声・言葉を通して狩人とソロは一種の三角関係にある、ということができる。村の広場で歌い掛けられる狩人は「いにしえの、よその土地の勇猛な狩人」、「栄光に輝くかつての自分」など、ソロの声・言葉によって現前するもうひとりの狩人と競合関係に追い込まれる。ソロの言葉に対して狩人は、野で獣と対決しその肉を持つてくる以外に真の狩人である証しを立てる術はない。狩人の「名（声）」とは出自や階級にすでに存するものではなく、あくまでも狩の実践の後に、しかし村に戻って与えられるものである。ソロはあくまでも村で狩人を待ち続ける。狩人の武勲は、村と野という二つの空間の両方に跨って、その往還の上に成立するのである。

狩人を野へと追い立てるソロの声の力は、川田が指摘する名を呼ぶ声の持つ二つの機能、すなわち「その差し向けられる相手に対してもつ対象特定性」及び「居合わせる他の人々も、その状況で書き添えにする、いわば非特定的な共犯関係設定機能」ゆえ、ということができよう。^{*26}しかし、狩人という武人をその標的とする時、マンデの誓め、煽る声は讃める声一般を越えた独特の力を帶びている。眞の狩人の証である獣を求めて、容赦なく狩人を煽り立て、野へと駆り立てるソロの声は異様なものまでの攻撃性を帶びている。「獣の肉を持ってこない奴に用はない」と言い放つソロの言葉に対して、狩人はさらなる狩の武勇を立てる以外に応える術はないのだが、そ

の武勇はつねに死の危険に晒されているのである。狩という野の獣を犠牲にした英雄的行為は、いつか猛獸によつて、あるいは殺された獣のニヤマによつて復讐される危険性をつねに帶びているのだが、それ以外に彼の狩人としての名声を守り、高める術はなく、狩人は生き続ける限り、つねに破滅の危機をはらんだ絶えざる自己証明を迫られている。ソロの声・言葉はそれによつて狩人が直面する死の危険の恐怖を克服し、忘れさせるに足る激しさを備えていなければならぬ。

死を賭けた武勇に狩人を駆り立てるソロはつねに死の絶対性、死への覚悟を訴え続ける。

強者がいかに長生きしよう

cebakca man men o men

たつた一日で担架^{*27}(の上の屍となる)

lon kelen ualanyan

人はすべて死という運命を逃れることはできないのだが、ひとたび狩の道に入った男は自らの命を賭けて武勲を追い求め続けなければならない。

しかしながら、たとえ彼が息絶え、その体が地に還つても、ソロによつて言葉を与えたその「名(声)」は時を越えて残り続ける。声によつて狩人を煽り立て、その武勇に言葉を与えることと並んで、それこそがソロのつとめなのである。野での武勇は村で待つソロの声によつて言葉を与えることによってようやく完結するのである。「名」を時間と空間を越えて残すことを目指す時、ソロ

の声には、戦士や王を讃め、煽り、その武勇をその子孫に語り伝えるグリオの声とある面では同じ力が託されている。それは文字と声の違いを越えた言葉が本来持つ根源的な志向性ということでもできる。

ドンソ・マーナに語られる狩人は遠い土地、後の世まで「名」を残した剛の者たちであるが、彼らの多くはもはやその「名」を歌い上げるソロの前にはいない。しばしばクラン名も出身村も明らかではないこれらの狩人の今に伝わっているのは、ソロの声にのつた彼の「名」だけなのである。今は「き偉大な狩人の冒險を語るソロの声にはつねに「追憶*nyeranif*」」の響きがある。

強者は鉄(=銃)とともに横たわっている

cebakca ni negulu lalen^{*28}

そして消え去った狩人の武勲を語るソロは目の前のもうひとりの狩人を狂おしい程に野へと駆り立てていく。その声に込められた二つの力は狩人を前にしたソロの中で分かれ難く一体となつている。

狩人の名声は野の獣たちを犠牲にし、また自分自身の死を賭した武勇にのみ存する。そして、ソロはひたすらに目の前の狩人を野へと駆り立て、そうして武勇を示し消えていった狩人たちの名を追慕の念を込めて語り継いでいく。狩がこのようなものとして続く限り、いかに執拗に野の獣の肉を要求し、それによつて狩人が命を落す危機に瀕しようとも、ソロが非難されることはない。ましてその声が物乞いの響きを纏うこともない。そこにあるのは行為と言葉の緊張に満ちた関係であり、グリオの住む村の世界のような社

会的地位の優劣は意味をなさないのである。聴く者を滅ぼしかねない程のマンデの誉め、煽る声はここではその声の主を貶めることなく、あくまでも野の世界に向けて発せられ続ける。

7 狩人とソロの歴史

以上 キタでの調査 及び文献資料をもとに、対人とその裏師の活動を論じてきた。最初に述べたように、狩を中心とするこれらの活動は次第に失われつつある。とりわけ地域の政治的、経済的中心として発達してきたキタ市に住む人々にとってそれは、今では遠い過去である。とはいっても、ここに描かれた武人と声の主のつくり出す世界は、整然として自己完結的に循環し続ける、いわば歴史の動態と隔絶した世界のように私たちの目に映る。その傾向は、私が調査を行ったキタ地方において特に顕著であると思われる。しかしながらキタもその一部である西スーグン一帯はヨーロッパによる植民地化によって初めて外部世界との交渉を持ったわけではない。西スーグンの現在は、アラブ、ヨーロッパ世界、そして奴隸交易を通じて新大陸をも巻き込んだ変化に富んだ長い歴史の結果としてある。そのことはまさにそれらの関係の証しである中世以来の様々な言語による文字記録によつて明らかである。^{*29} それでは、つねに変動の過程にあり続けてきたマンデ世界と、狩人とソロの循環的な世界との間のそれはいつたいどのように考えればよいのであろうか。

循環的、非歴史的な狩人の世界像の成立には、前節まで述べてきたようなマンデ社会における狩人とソロの位置、両者の関係、残される「名」の意味などに加え、「伝統的なマンデ社会」をめぐる調査者、被調査者双方の立場、両者の関係などが複雑に関与している。それは、狩人の世界を越えた、現代マンデ世界における言葉のあり方に関わる重要な深刻な問題の一部をなすものである。最終的にこれは現代アフリカ文化の存立自体に関わるであろうこのような問題をこれから追求すべき課題として視野に入れながら、最後にこれまで論じてきた狩人の世界像の成立過程についてキタ地方の事例に即して考察を試みて、本論を終えることにしたい。

本論でも度々引用したマンテの狩人に関する論文の中で、CLISSE
は中世マリ帝国の成立における狩人の役割を次のように述べている。
「實際、ス堪ダン人の歴史の中で初めて、部族や階層やカース
ト等の觀念をすべて排除し、すべての成員に共通のカルトに基
づいた政治・軍事的組織がセネガル川上流部とニジェール川上
流部の間に位置する地域にその権力を打ち立て、さらには大西
洋からニジェール川大湾曲部、ギニアの森林地帯からサハラ砂
漠を覆う広大な地域を征服するに至ったのである。」
*30

弓矢や、後には銃などの武器は国家形成の重要な要因であり、それらの武器の使用に習熟した狩人たちは集権的国家の成立に関与する潜在的可能性をつねに持っていたと考えられる。実際、グリオの語る口頭伝承、いわゆる「歴史伝承」は一三世紀のマリ帝国、あるいは十六世紀のセグー王国といったマンデの国家の勃興期に狩人が重

要な役割を果したことと伝えている。^{*31}

ソロの語る英雄＝狩人と、グリオの語る英雄＝自由民・戦士の相違、共通性は、多数の研究資料の比較検討を必要とする、本論的目的を越える問題であるが、ソロの語る伝承に関して興味深いのは、そこで語られる狩人と村の関係の両義性である。右にも述べたように、野における狩人は獣を狩り続ける、いわば野の破壊者として一貫しているのだが、村に対する時の狩人は、一方では獣の肉をもたらし、奴隸狩から村を守ってくれる守護者であるかと思えば、他方では自らの武勇のために村の撃破することも厭わない、村に災厄を及ぼす武人としても描かれている。^{*32}

狩人こそが村を見守るのだ

しかし奴は何もしてやれない

狩人が有り難いのは

炎いが振りかかった時だけ^{*34}

キタにおいても、モスクに糞をする獣を、土地の主だからといって反対する村人の警告を無視して殺したために、村中に災厄をもたらしてしまった狩人の物語が伝えられているが、狩人とはそのような者、と語られるのみで、その破壊的行動が非難されるわけでも、動機が正当化されるわけでもない。それらの伝承のうちに私たちは「野の獣を狩る者」だけには收まりきれない、いつ何時村の世界に関わりを持たないとも限らない、かつての狩人の姿をうかがうことができるのではないだろうか。先にも述べたように、武人であることは、狩人に限らず、今日もなおマンデの男一般に期待される性格

である。^{*35} 実際には様々な程度に重なってきたと思われる狩人と自由民・戦士という二種の武人のそれぞれに、ソロ、グリオというそのまま「名」を残すこととに専念する言葉の主が存在してきたことは、無文字社会マンデにおける「歴史」の複雑さを如実に示している。果たして狩人の「名」を伝えるソロの「歴史」観がグリオのそれに比べてより構造的、循環的な性格を備えている、とマンデ系社会一般に関するいえるかどうかは、今後さらに検討を進めるべき重要な問題である。

いずれにせよ、狩人の活動は、国家形成、いいかえれば村の世界の拡大、野の世界の変質に関与する大きな潜在的可能性を持ついたのであるが、その点で植民地化以前のキタの狩人とソロたちはいかなる状況にあったのであろうか。今日ではもはや過去の、特に植民地化以前の戦乱の世におけるキタの状況を再構成することはほとんど不可能である。しかしながら、第2節において述べた通り、口頭伝承、ヨーロッパ人の記録等から推測する限り、植民地化されるまでキタ地方には大規模な軍事力が関与しうるような集権的な国家が成立することはなかつたと考えられる。特に一九世紀のこの地域が近隣の国家による奴隸狩や略奪が横行する極めて混乱した状況にあつたことは、植民地化を正当化しようとする意図もあつたにせよ、当時の行政官の報告書や神父によるキタの人間からの聞き書きなどからうかがうことができる。^{*36} これらの証言からすれば、キタ周辺においては狩人が広い地域を巻き込んでその軍事的特性を發揮する、つまり村の世界の権力争いに関わるような事態はほとんど起らな

かつたと推測されるのである。

そのような状況からすれば、仮に狩人の「名」を残そうとするソロの「歴史」観は本来的に構造的、循環的な性格が強い、とマンデ系社会一般についていえるとしても、今日語られる、野の獣を追うことに終始するキタの狩人の姿は小国が乱立し、権力が集中することのない一九世紀のこの地域の状況によく合致している、といえよう。そして、野の獣を狩るのみならず、時には村に対しても災いを及ぼしかねないまでに破壊的な狩人の武人的な性格は、つねに奴隸狩や略奪の危機に晒されていた戦乱の時代の空気を色濃く反映するとともに、狩人の結社がいつ圧倒的な軍事組織に変貌して村の世界に介入するともわからない、つまり野と村の間の往還から逸脱する可能性をつねに秘めていたことを暗示しているように思われるのである。そこでは、野をさまよう狩人は獣や精霊たちだけでなく他の人間に対しても身を守らなくてはならないのだが、そのような武装し、絶えず身構える男の姿は村に住む者にとってはつねに両義的な存在であらざるをえない。^{*37} このような不安定な世界に対し、狩人の名を残そうとするソロの言葉がどれほどまでに強固で安定したものたりえたのか、現在ではもはや知るすべもないのであるが、しかしながら、このような状況は植民地化の過程で行われた平定政策によって決定的な変化を遂げた。近代的な軍事作戦を除いて一切の戦争、奴隸狩、略奪行為を禁止する植民地政府の政策は西スードン一帯に平和状態を確立したが、当然その過程で狩人の持っていた軍事的側面をも剝奪した。戦争状態がなくなってしまった、狩人

の活動はもっぱら野の獣を対象とした狩に限定されざるをえない。そこではもはや、野の獣の肉か、あるいはその不可思議な報復以外に、狩人の行為が村の世界に関わりを持つことはなく、彼はもはや野の獣を狩る男でしかない。そして、この狩人が狩人でしかなくなったという状況変化は、実はそれ以前の戦乱の時代にもまして、今日語られる狩人とソロの世界によく合致するものである。ソロが言葉を与えるべき狩人の武勇は、もはや狩以外の何物にも逸脱していく可能性はない。村の世界から離れたひたすらに野の獣を追う狩人と、ひたすらに狩人を讃め、煽るソロの組み合わせは、一見歴史を超えていたりするが、実は植民地化以降の状況にこそふさわしいものである、と考えることができる。

しかしながら、再三述べてきたように、かといってそれは、不可思議な野が消え去り、精巧な狩猟技術が導入され、さらには環境保護の観点から狩猟活動も制限される現在のものでもないのである。このような状況の変化を考えれば、結局、「狩人とソロの非歴史的、あるいは超歴史的な世界」は、「黒人だけの世界は終わつたが、いまだに白人は到来しきっていない」という時期に束の間のあいだ、実際に成立し得たものである、と考えるべきではないだろうか。その世界はかつていわれたように始源の時から変化することなく保たれてきたものではないが、かといって昨今しばしばいわれるよう、近代になつて「発明」されたに過ぎないもの、でもない。戦乱状態は終止符を打たれ、狩人が村の世界の権力争いに積極的に関わることはないが、いまだ広大なマンデのサヴァンナの隅々にまで「白人

的なるもの」が充満してはいないうち、次第に植民地化の進むマンデ世界の辺境に生きる黒人にとってそれはひとつの現実であったのではないだろうか。そして、そのような空間の「質的差異」がほとんどなくなってしまったと感じる一九八八年から九〇年の私とキタの人々の間では、その「現実」の完全な姿は、アルファベット文字を用いた記録とともに始まつた近代的時間の成立する以前、すなわち「白人が来る前」に見据えられることとなつた。³⁸

結局、前節まで論じてきた狩人とソロの世界は、狩人を讃美讃えの声をめぐって「白人が来る前」という合い言葉のもとに私とキタの人々が作り上げた、実は一八八一年以前でも、また調査の行われた一九八八年から九〇年でもない、その二つの時間の間にきっとしばしの間実在したであろう狩人とその樂師の活動についての多分に理想化された世界である、と私は考へている。もちろん、それは限られた資料から推測した多分に仮説的な結論に過ぎないが、しかしそれでも、「白人の到来」が狩人の活動、そしてソロの声・言葉のあり方に及ぼしてきた影響の甚大さをそこに感じることはできよう。

ソロに限らず、マンデ世界の声・言葉の近代、現在、そして未来については、その厳しい状況に比べて十分な注意が向けられてきたとはいがたい。ここに試みた現在のキタの狩人をめぐる言葉の考察は、グリオを始めとする現代マンデ世界のその他の様々な言葉の考察へ向けての試論として位置づけられるべきものである。

死は人を終わらせる
だが名を喰い尽くすことはできない

付 言

本論文は、石坂記念財団の奨学金援助を得て、マリ共和国人文学研究所の共同研究員としてキタ周辺を中心に行われた調査に基づくものである。また、調査の全段階にわたって、川田順造東京外国语大学教授を研究代表者とする「ニジェール川大湾区諸文化の生態学的基盤及び共生関係の文化人類学的研究」（文部省科学研究費補助金による海外学術調査）のメンバーからの支援と助言を受けた。

秘術を尽くして野の獸を狩る狩人も、彼を讃め、煽り、その名を残すことには努めるソロも、ともに長い歴史過程の中で生成、変化してきた西スーザン文化の一端をなすものである。それらは、西スーザンがかつてないような根底的な変化の百年を経た今日、たとえ残酷、なれの果て、あるいは紛い物、といった言葉でしか語り得ないとしても、キタの地に生きる人々の暮らしにそのしをとどめてきた。「語られた『白人が来る前』の世界」は、そのようなキタの歴史を背景に『白人』調査者の介入をきっかけにして顕在化した、極めて今日的なものであるが、それもまたソロとは流儀を異にする「白人が到来する前の黒人」の「名」を残そうとする嘗みのひとつと考えることはできよう。しかし、言葉を与えるべき行為を奪われてしまえば、死を賭けた武勇と、讃め讃え、煽り立てる声の緊張に満ちた関係もまた失わざるをえない。彼らの世界のうちで残っているのがまさに『名』を伝える声」だけとなる時、ソロの声はそれでも、たとえ無害の口承文芸としてでも残り続けるであろうか。

キタや人文科学研究所の方々を始めとする調査を支えて下わたす

べての皆様、そして本論の草稿を読んで貴重な助言を下さった方々に心より感謝いたしました。

* 4

黒人アフリカにおける讃美歌について Ruth FINNE-GAN, *Oral Literature in Africa*, Oxford, Clarendon Press, 1970: 111-146; 三田順造『詩』筑摩書房（一九八〇）等を参照。

* 1 今日、griot どころか言葉は、内婚世襲の語り部・樂師、あるいはそれに類似した者を指し示す一種の一般名詞として

マンデ系社会以外でも主にフルハス語圏の西アフリカ各地の社会で用いられている。この現象は、グリオ的な言葉の制度のマンデ系社会を越えた広がりを示しており、素朴な部族像では捉え難い西スーザンの社会構成のある方ともく合致していると考えられる。

* 2 Djibril Tamsir NIANE, *Soundjata, ou l'épopée mandingue*, Paris, Présence Africaine, 1960; Sory CAMARA,

Gens de la parole, Paris-La Haye, Mouton, 1976; John William JOHNSON, *The Epic of Son-Jara*, Blooming-ton, Indiana University Press, 1986; Youssouf Tata CISSE et Wa KAMISSOKO, *La grande geste du Mali*, Paris, Karthala et ARSSAN, 1988 等。

* 3 グリオも同様、クロの活動は歌、語り、楽器演奏のすぐれにわたり、とりわけその声は「歌い語り」とても呼ぶべき融通無碍の変化に富んでいる。本論では便宜上「狩人の樂師」という語を用いるが、その活動は樂師の語り部、やして儀式司祭を兼ね備えたものである。

* 5

グリオの活動については CAMARA op. cit. の他 Yusuke NAKAMURA, "Mendicité et louange: le statut social des griots villageois (Cercle de San)" in KAWADA Junzo (ed), *Boucle du Niger-aproches multidisciplinaires* vol. 1, Tokyo, ILCAA, 1988; 中村雄祐「サバンナの音の主・グリオ」『季刊・民族学』四六号、

千里文化財団（一九八八）を参照。なお、今日認められるグリオのあり方には、複雑な社会組織を発達させた中世の广域交易国家の繁栄、それに続く西スーザン各地に戦争國家が成立した十七~十九世紀の動乱の時代、からにその後の植民地化、独立、という歴史過程が深く関わっており、

これは述べたのはその一面に過ぎない。グリオの語る歴史伝承をめぐる問題に関しても、中村雄祐「マリンケの歴史伝承の現在」『人口承』研究の「現在」、筑波大学歴史人類学系日本民俗学研究室（一九九一）、及び日本口承文化学会第15回大会（於筑波大学）に開催のシンポジウムの発表レシート「語りの代金の諸側面」を参照。同質の問題はその根底においては、その底については最終節において密接に関わっているが、その点については最終節において

触れ。

* 6 例へば John William JONHSON *op. cit.* と Youssouf Tata CISSE et Wa KAMISSOKO *op. cit.* の間のクリオ

の伝承に対する評価の違いを参照。
* 7 植民地化以前からいの地域、キタ・ジャマナに住んでいた
のが、ヤンゴンの中でもマリンケ（西称はマリンカ、
maninka）と呼ばれる人々であるが、マリ共和国の中規
模の都市のひとつとして発展して来たキタ市には現在多様
な地域出身の人々が住んでる（一九八八年現在、キタ市
の人口は約一万八千人）。キタの歴史については G.
TELLIER, *Autour de Kita*, Paris, Henri CHARLES-

LAVAUXELLE, 1898; Nicholas S. HOPKINS, *Popular*

Gouvernement in an African Town, Chicago and London,
University of Chicago Press, 1972 参照。
* 8 Joseph M. CUOQ (traduction et notes), *Recueil des sou-
rces arabes concernant l'Afrique occidentale du VIII^e au
XVI^e siècle (Bilad al-Sudan)*, Paris, Edition de CNRS,
1985 等を参照。

* 9 TELLIER *op. it.* p. 23, 32. ヨーロッパではこのフルグ
族 (Foulahs) やは、ヤンゴン語を話す。農耕に従事す
る、身体的特徴も他のベータン系黒人ほどよく見分けの
つかない、いわゆる “ヤンゴン化した” フルグである。

* 10 ここでは便宜上、あたかも一つの別々の原則が集団形成に
触れていたかのように記述を進めているが、実際にはマ
ンデの社会集団の持つ二つの “側面” は極めて複雑な
関係にあつた。例えば、地縁と血縁の両方を暴力的に奪わ
れた存在である奴隸階層を含む社会階層化は原理的に父系
出自による社会組織にとっては破壊的な性格を備えている。
* 11 Jean BAZIN, “Guerre et servitude à Ségou” in C. MEI
LLASSOUX (ed.) *L'esclavage en Afrique précoloniale*,
Paris, François MASPERO, 1975, pp. 135-181.
* 12 狩人の不思議については狩人以外の人間からも様々な噂、
目撃談等を聞くことができたが、狩人自身に関する知識とな
るべく、私が知り得たものは断片的かつ通り一遍の説明の域
を出るものではない。
* 13 対象への破壊的行為とは、例えば、触れてはならない物に
触れる、話すべき言葉の順序を誤る（特に語り部の場合）、
など、単に物理的な破壊だけではなく、秩序の攢乱的な行為
を含むべきである。

関わっていったかのように記述を進めているが、実際にはマ
ンデの社会集団の持つ二つの “側面” は極めて複雑な
関係にあつた。例えば、地縁と血縁の両方を暴力的に奪わ
れた存在である奴隸階層を含む社会階層化は原理的に父系
出自による社会組織にとっては破壊的な性格を備えている。
* 11 Jean BAZIN, “Guerre et servitude à Ségou” in C. MEI
LLASSOUX (ed.) *L'esclavage en Afrique précoloniale*,
Paris, François MASPERO, 1975, pp. 135-181.
* 12 狩人の不思議については狩人以外の人間からも様々な噂、
目撲談等を聞くことができたが、狩人自身に関する知識とな
るべく、私が知り得たものは断片的かつ通り一遍の説明の域
を出るものではない。
* 13 対象への破壊的行為とは、例えば、触れてはならない物に
触れる、話すべき言葉の順序を誤る（特に語り部の場合）、
など、単に物理的な破壊だけなく、秩序の攢乱的な行為
を含むべきである。

Youssouf CISSE, “Notes sur les sociétés des chasseurs
malinké”, *Journal de la Société des Africaniens*, 34-2,
1964, pp. 175-227. 男だけが参加する狩の世界と女と
の関係は複雑な性格を備えている。CISSE は狩人の起源
神話における母性の恵みを強調する一方で（狩人はすべて
伝説的な女性、サネの子供である）、狩人にとって女性と
の性的接触は獣のキャラクター並の大敵である、と述べている。
- 118 -

彼らの二人の“女”的関係については特に論じておらず、私自身、この問題に関する議論を行うに充分な調査資料を持てていない。しかしながら、善なる母と、邪なる女・妻という「人の女は、後で見るよう」に、ソロの語る狩人の物語の重要な登場人物である。

* 15 CISSE *op. cit.*, p. 179.

* 16 CISSE ジュヌゼー、このような世襲的な社会的属性の否定は、狹義の出面を越へて、この民族の次元をも含むところ。CISSE *op. cit.*, p. 176.

* 17 Kélégu A. MARIKO, *Le monde mystérieux des chasseurs traditionnels*. Paris, Nouvelles Editions Africaines, 1981, p. 15.
* 18 CISSE *op. cit.*, p. 221.
* 19 ソロの活動がグリオのものと類似してゐる考え方には、『狩人のグリオ (*domsajeli*)』ところの別称からもつかがわれる。

* 20 ソロの演奏様式、楽器等に関する記述、分析は別の機会に譲ることにする。

* 21 ソロは狩人の儀式司祭という役割を担っており、とりわけ殺された獣のニャマが発現するといわれる狩人の臨終、葬儀に際してはソロの参加が不可欠であるとされるが、私はこれらの点に関してはほとんど調査を行うことができなかつたことをいに断つておかなくてはならない。狩人に

* 22 キタのソロ、サンガナン・クリバリによると。
* 23 誉める行為をあらわす語は、『マジヤム』の他にもあり、語源的にもそれぞれの意味するところには差異が認められるが、日常的には逆回語として用いられることが多い。
* 24 CAMARA *op. cit.*, pp. 237-249; Dominique ZAHAN, *La dialectique du verbe chez les Bambara*, Paris-La Haye, Mouton, 1963, pp. 125-148 参照。
カイ地方ジャムカラキタを訪れたソロ、ムラマ・マコロによると。

* 25 フラミウグ出身、キタ在住のソロ、テハバ・トラオレによる。

* 26 川田順造『聲』(前掲書)、一四九ページ。
フランク出身、キタ在住のソロ、テハバ・トラオレによる。

* 27 * 28 キタのソロ、サンガナン・クリバリによると。
川田順造『サバンナの手帖』、新潮選書(一九八一)等を参照。

* 30 CISSE *op. cit.*, p. 176.

* 31 Djibril Tamsir NIANE *op. cit.*; Youssouf Tata CISSE et Wa KAMISSOKO *op. cit.*; Lilyan KESTELOOT avec un récit de Tairou BEMBERA, transcrit par Mamadou Boidié DIARRA, *Le mythe et l'histoire dans la formation de l'empire de Ségou*, Dakar, IFAN 1980 駕々然黙。

* 32 CISSE *op. cit.* p. 189.

* 33 Charles S. BIRD with Mamadou KOITA, Bourama SOUMAOURO (translation), *The Songs of Seydou CAMARA, vol. I Kamibili*, Bloomington, Indiana University, 1974. 駕々然の壯語。

* 34 Dosseh Joseph COULIBALY, *Récit des chasseurs du Mali, Dinga Kamibili: une épopée des chasseurs malinké de Bala Jima JAKITE*, Paris, EDICEF, P. 20 原文は。*

* 35 キタの人間が *ce farin* ルンバ、駄駄の意を込めた語をハラハラ語に訛す時、“homme méchant” ルンバ語を “トヘガ” やれば賞賛のためにややく méchant ルンバ語を用ひぬるハラハラ語に沿けた諱的用法とは性格を異じて。*

* 36 TELLIER *op. cit.* pp. 5-31; Bonifacé KEITA (transcription et traduction), *Kita dans les années 1910* (texte recueilli par Monzon TOUNKARA et le père

BARRIE), Bamako, Editions JAMANA, 1988, pp. 5-29.

* 37 キタのおなれ狩人ば、若こ更聞こた語レヒード、ヤール人の奴隸狩に家の者を連れ去られた狩人が後を追ひて野獣してじょといふを襲ひて取り戻した、という話を聞かせてくれた。同種の逸話は他にもあつたのではないかと思われるのだが、キタのソロからはそのような対人の武勇についてはあつことはできなかつた。いのうなソロ以外の人間（特に狩人自身）が語る狩をめぐる多様な言葉の中にソロの言葉を位置づけて考察するといふと今後試みる必要がある。

* 38 ニーロ・ペル到来の文字文化を体現していたイスラム文化が西ペーダンに及ぼした影響は一樣ではないが、植民地化当時、キタはほとんどイスラムが浸透していない地域のひとつであったといわれて。〔臣入的なもの〕あるいは近代がマンデの空間に、そして個々人の意識に浸透するための装置、浸透の過程につけば、別の機会に論じたい。（なかむら豊一著、東京大学）